聴いていたからです。

◇ ある少年からの影響

コミュニテイで働く決意をさせたある出来事を思い出しました。3日間の訪問を終えて汽車で帰る時、5~6年コミュニテイで過ごし、退所する17歳の少年Vincent と一緒になり、彼が駅で降りるまで30分ほどおしゃべりをしました。

彼は、コミュニテイで前を向いて生きることを教えてもらったと感じていました。この体験がなければ、今もトラブルを起し、多分、刑務所で生涯を終えているだろうと、彼は言うのです。彼から、私がコミュニテイで働くのかと聞かれ、まだ決めていないけれど、どう思うかと彼に聞きました。彼は、私があそこで働くべきで、うまくやれると言ってくれたのです。

司会　ここで、ちょっと5分ほど休憩させていただきます。

— 休憩 —

8．英国の児童養護統計

トムリンソン：　それでは、英国で治療施設に入っている子どもたちがどうしてそういう状況になってしまったのかということの背景を少しご説明したいと思います。

当時のイギリスにおいて、10歳以下で施設に入ってる子どもは1万5千人でした。

当時の18歳以下の子どもの数は、調査では、1,200万人ですが、この数から考えると、この施設に入っている子どもたちの数は、大体0.04%に相当します。

ここで、いくつかこの統計について、お話しします。たくさんの資料がありますので、統計のデータにご関心のある方はお声掛けいただきたい。メール等でお渡しすることできますので。

子どもたちの年齢層では、治療施設に入っている子どもたちの多くが5歳から9歳、10歳から15歳、そして15歳以上と区分けされております。イギリスの場合は、初めて施設に入った年齢が10歳以上が、かなり多いのです。その理由として多くあげられるのは、やはり家族によって虐待をされたとか、ネグレクト、育児放棄だったりします。また必ずしも虐待は受けていないけれども、家庭の状況が混沌としていて、あまり家庭にいることが子どもにとって安全ではないと判断された場合に施設入所に至る場合が多いという状況です。6万5千人の施設入所していたその子どもたちのうち、約5万人が虐待やネグレクトをされている。もしくはその家族が家庭内に深刻な問題を抱えていたという状況にあります。日本では、かなり違った状況なのかどうかわかりませんけれども。その施設入所する子どもたちのうち、虐待を受けた子どもの比率は、イギリスと比べるとかなり低いのではないかと思うのですが、いかがでしょうか？

どういった子どものケアを提供していくのかということが、ここでは非常に関連すると思います。例えば、虐待を受けた子どもなのか、それとも親が亡くなってしまった子どもなのかということによって、どういうふうにその子にかかわるのか。ここにかなりの違いが出てくると思います。

英国で6万5千人の家庭外に措置される子どものうち、実際にレジデンシャルケアという形で施設に入る子どもたちは5千人にすぎません。残りは、フォスターペアレンツ、フォスターケアーという形で里親に委託され

ます。もちろん自宅で過ごしている子どもたちでも、情緒的な問題を抱えている場合もあるかと思いますが、実際にケアする子どもたちでそこまで情緒的な、メンタルな問題を深刻なものとして抱えていないという状態もあります。子どもの状態が、そこまで難しい状況ではないというときには、それほどの支援やトレーニングは必要なく、ケアできるかと思いますが、大変なトラウマを抱えた、非常に困難な状況で過ごしてきた子どもは、施設入所であれ、里親の元で暮らしている子どもであれ、やはりきちんと経験を積んだ方からのアドバイスを受けながら、その監視下のもとに、十分なトレーニングを受けて、対応をしていく必要があります。

またこのコミュニティーの中では、かなりの回数でミーティングを開いて、問題に関するいろんな情報共有と経験を共有する機会を得ています。ほかの方々からの指導も得ながら、シニアの経験を積んだスタッフのアドバイスを受けます。また、仕事に関する書物を読んで、そういった情報源にも頼りながら、毎週のようにトレーニングを重ねていました。

日本の状況を私はよく存じ上げませんが、今後、こういった子どもたちと関わっていかれる方、もしくは、今現在関わられる方がどういう状況なのか伺いたいと思います。

このような子どもに関する問題はどんどん大きくなってきています。こういった難しい環境に置かれている子どもたちの数が、どんどん増えているという状況にあります。それに対応するためには、何をしなくてはいけないのか。何が必要とされているのかを検討しなければいけません。

9．相談・運営・研修について

◇ 相談と運営

当時、私は、コツワルド・コミュニテイの相談担当者たち（Barbara,Isobel,Eric）がいかに経験豊富で特別な人たちだったかに気が付きませんでした。この人たちが、コミュニテイの仕事に極めて重要である一方、仕事を支える文化とシステムをつくって下さったことが更に重要なことでした。

毎日、コミュニテイで起こったことを議論し考えるマネージャー・ミーテイングがありました。ケア担当者は毎週、個別のスーパビジョンをチームマネジャーか、治療臨床を監督する立場のチームの上級職から受けました。

私どもは毎週、仕事についてすべてを語り合うチーム・ミーテイングを持ちました。毎週のチーム・ミーテングで、少年たちの治療的業務について顧問相談員と話し合いました。また２週間ごとに、同じ顧問相談員との個別ミーテイングもありました。

◇ 研修

毎週、１時間のグループ研修があり、そこでは、別のハウスのスタッフや先生たちに会い、前の週に読むようにと与えられた資料について討論しました。

文献類は、通常、かなり難しいもので、Donald Winnicott の論文などでした。　この仕事は、知的にも精神的にもかなり厳しいので、コミュニテイは大卒者しか採用しませんでした。

10．子どもの問題と職員の対応

◇ 鼻の怪我

最初の2ヶ月が経った頃、少年達の一人が、夜、私がハウスで寝ているときに攻撃をしてきました。私はうまい対応ができなくて、明け方に鼻の骨を折られてしまったことがあります。彼は、非常に難しい子どもで、なんとか彼にちゃんと関与しようと努力をしていた状況で起きたことですが、そんな目に遭ったことがあるのです。

当時、私は、この仕事のなかで非常に難しい時期に差し掛かっていました。実は私の前任者が、休暇をとって、そのあと帰ってこなかったので、空いてしまった職務を私が埋めるという形で、後任になりました。

その前任者が戻ってこなかったことで、子どもたちは非常に怒りを感じていて、我々に不信感を募らせていたのです。ですから、私が着任したとき、いずれ私もいなくなるだろうと、私を試すような態度に出たわけです。就任して最初の数カ月間は、少年たちは私に対していじわるをしてきましたし、暴力をふるったこともあります。何かやってあげようとすると、すぐに拒絶するような反応が返ってきました。

◇ 仕事における精神力

もちろんそういうアグレッシブな暴力的な子どもたちに対応することは大変ではありますが、それ以上に私がつらいと感じたのは、感情的にここまで対立してくる、挑戦されてしまうというところが、非常につらく感じました。もちろん、お子さんをお持ちの方でしたら、ある程度分かって下さると思いますが、こういった難しい子どもたちと向き合うことは、普通の子どもの恐らく10倍ぐらい大変なことではないかと思います。

絶えず、拒絶され、敵意のある対応を受けると、消耗し、気力もくじけて、もうダメだと思うことが何度もありました。

あるとき、私は、もうこれ以上続けられないという限界に達したという気持ちになったことがありました。ある日、相談顧問のバーバラ先生にとても怖くなってきたことを訴えました。どこまでもこの仕事が大変で、本当にこれ以上続ける自信がないという話をしたときに、彼女は共感してくれまして、ただ、「**今、最も大事なことは、ただ、そこで生き延びて、翌朝もそこにいること**」と教えてくれました。そしてそのことがどんなにか大変かを強調されました。この言葉は、これまで言われた中で最も助けになるものでした。

これは、こういう子どもに対応している保護者にでも言えることではないかと思います。ほんとに子どもが難しい状態になったときに、あまり深く考えすぎずに、ただそこにいてあげるということを、ぜひ、心に留めていただきたいと思います。

◇ 強力な否定的感情の扱い方

そういう子どもたちに対して世話をしてあげる。これはそうしてあげたいからという気持ちから、私たちは面倒をみるのですけれども、時に、本当に腹が立つことも、怒りを感じることもあります。

それは、こんなに世話をしてあげたいと思っている子どもたちに対して、そういう気持ちで仕事を始めたにも関わらず、自分のなかにそういう感情を見いだしたとき、非常にショックを覚えるのではないかと思います。私が知っている多くの方がおっしゃることに、子どもたちが自分にぶつけてくる感情以上に、自分たちが子どもに対して抱く感情のほうが向き合うのがより大変だということです。

Donald Winnicott は、このことの真実と重要性を 1956 年の画期的な論文『憎しみと逆転移』に書いています。

特に、私を絶えず苦しめたある少年を思い出しますが、彼は私の弱みを見つけては絶えず、事件のキッカケをつくってゆくのでした。私は、反応しないようにして懸命に働いていました。

ある時は、彼が私にからみついてきた時、彼を追い払う衝動を抑えるために自分の手を背中にまわしていたことがあります。

彼は、こうしたことすべてを面白がっているようにみえました。

こうした仕事をめざす多くの大人は、子どもたちのためによいことをしたい、自分たちは世話する人と思っているとき、彼らの中にこうした強力な否定的感情が潜んでいることを見つけることはショックでした。

◇　反社会的行動は希望の兆候

Winnicott は、そういう感情は問題でないけれど、その感情から子どもを拒否したり、傷つけたりしないことが重要と指摘しています。

子どもたちは、あなたが自分たちの気持ちをわかってくれるのか、気分を害したら何をするのか、それでも自分たちの世話をしてくれるのか、それとも辞めてしまうのか、又はこれまで彼らが経験したように彼らを殴るのかを見ているのです。

Winnicott を引用すると、もう一つの重要な考えは、子どもの反社会的行動は希望の兆候なのだということです。

子どもの難しい行動は、彼らが何か必要なものを求めているサインなのです。完全に引き籠っている子どもより、問題をおこす子どもの方が、見込みがあるのです。

こういった難しい行動をとる子どもたちの行動によって我々は本当に嫌な思いをしたり、怒りを感じたりしますが、子どもが、時には、こういった行動を表に出すことが、プラスの意味を持っている兆候かもしれないという説ですね。非常に静かにして、自分の気持ちを抑えている子どもよりも、表に出せるほうが、まだいい側面がある。逆に抑え込んでいるほうが、より大きな問題を抱えている子どもたちであるということです。

◇　幼少期の子どもの発達との関係

最初の数か月で、コミュニテイは臨床面と組織運営の両方の面で際立った方法をもっていて、それがよく機能していることが私にもわかってきました。

私たちは、研修として沢山の抄読資料を与えられ、ガイダンスを受けていました。

時々、グループ研修で、母親と赤ちゃんのビデオを見ることがあり、当時、このことは何かヘンに思えたこともありましたが、これは、私たちがやっている仕事と大変関係があることがわかりました。

ある意味で、少年たちは 7～14 歳でしたが、乳幼児と共通すること以上のニーズがあったのです。

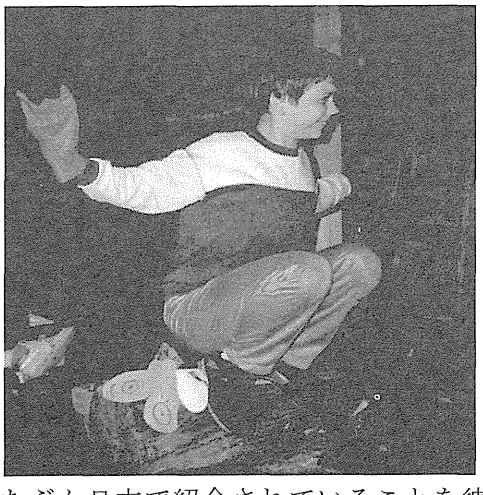
彼らは、幼児によくみられる反応や怒りを示していたのです。

施設ケアに関わっている方も、里親として関わっている方も、やはり子どもの発達をきちんと押さえておくということが非常に重要になります。特に、最初の２、３年が非常に重要です。ネグレクトを受けたり、トラウマを負った子どもたちは、特に幼少期にそういう状況に置かれてしまうと、物理的な意味でも、脳に影響が出てきます。ですから健康

な発育をしている子どもたちと比べて、実際にそういった難しい環境にあった子どもたちの脳は、物理的にも小さくなっていることがわかってきました。よく言われるのは、そういう子どもたちは、やはり発育が遅れてしまうということです。私が関わった子どものなかでは、例えば13、14歳になっても、2、3歳ぐらいの幼児のような反応を示す子どもたちも多くいました。

コミュニティの遊び

この少年はフランクという名の子どもです。



たぶん日本で紹介されていることを彼が知ったら、非常に喜ぶと思います。(笑) 彼は32歳ぐらいの大人になっています。この写真の当時、彼が何歳だかおわかりになる方がいますか。おっしゃっていただけますか。

会場： 13歳！

トムリンソン：そうですね。12歳でした。どこに行っても、私の手をつなぐ子でした。コミュニティーの中でメンテナンス作業をしてくれる男性がいて、何かものが壊れると修理してくれる人ですが、よく彼にからかわれたのは、フランキーが私の手をいつもつないでいるので、多分、私の腕が長く伸びてしまうのではないかと言われました。

フランキーのような少年とのかかわりは非常に興味深いものでして、まるで私を彼は母親であるかのように扱っているのですね。非常に大きな支援が必要な子どもでした。

◇ 明確な治療的対応の重要性

やはりシニア・ボランティアとか、スーパーバイザーのような方といろいろと相談をする、議論を重ねる機会を持つことが重要です。それは、

理論と実践に支えられた働き方が極めて重要であるということです。そして理論と実践は固定したものではなく、絶えず進化しているものであることを知ることが同時に重要です。

コミュニテイの中でのスーパービジョン、相談、研修などの様々なフォーラムが常に我々の経験を広げ、自分たちの取り組みの改善を模索させてくれました。

最初の数か月の間に、私はこれらのフォーラムの重要さを認識しました。

◇ 経験したことの意味を理解すること

子どもの行動はすべて意味があるという考え方があります。特に、トラウマを受けた子どもたちは、うまく言葉で表現できないことが往々にしてあります。けれども、よく観察すると、遊んでいる姿とか、写真、どうやって周りの人と関わってコミュニケーションをとっているのかということから、読み取れることが沢山あります。

スタッフが自分たちに投げかけられたすべての困難を処理する場合、支援を受け、よく考え、経験したことの意味を理解する余裕を持つ必要があります。

そうしなければ、仕事はすぐに完全に混乱と、圧倒的で不可能な状態になってしまいます。このことは、子どもたちが、世の中と自分た

ちの人生をどうみているかの反映なのです。

ケアをする人は、自分たちの経験を理解し、子どもたちには、時間をかけて、彼ら自身が自分の経験を理解できるように助けけることです。

大事な考えは、どんな行動にも意味があるということです。その意味をみつけるまで、ただ時間と空間と注意深さが必要なのです。

◇ 養育者（carer）になること

最初の数か月を経てから、私は一人の子どもの担当になりました。その役割は、彼の毎日の必要な世話をし、とくに愛着関係を築くために彼の精神的な状況に気を配り、彼に特別な関心をそそぐことでした。

私は、長時間勤務によって確かに養育者としての役割を果たしました。

もし、この子どもたちが、いろいろな意味で、幼児に似ていると考えるなら、子どもが一人の人と集中した関係をもち、他の人々とは支援的関係をもつことは明らかに大事なことです。

そして、子どもがある特定の一人の人と深い愛着を感じる関係を築かなくてはいけないのです。もちろん複数の人との関係でも構わないのですが、本当にその子が発育していく上で、必要な特別な関係を築かなくてはいけないという考え方です。

◇ 少年達と私

これはある３人の少年たちと旅に出たときの写真です。こんな子たちが、そんなにトラブルを巻き起こすようには見えないですよね。非常に寒い時期でしたけれども、行き先に到着したすぐあとに、一番右側の

子が突然いなくなってしまいました。30 分後ぐらいにホテルに戻ってきましたが、腕いっぱいに木材を抱えていました。「どこから持ってきたんだ」と聞くと、「これでたき火をしよう」ということで、隣の養鶏所から勝手に持ち出してきたのでした。

こういう子どもたちの世話をしているときに、休暇でどこかに旅行に出掛けるということは、日常のルーチンの生活リズムから離れて旅行するわけですから、重要なのですけれども、一方で、違う環境、違う生活の味に慣れるところで非常に難しい部分もありました。

◇ 一貫した関係の重要性

われわれが一番重要視することの一つに、子どもにとって、本当に一貫性のある、また信頼のあるルーチンで生活する場を作ってあげるということです。聞こえはよくないかもしれませんが、これが非常に重要なポイントです。神経科学の研究でもこのことは実証されています。発育上、非常に重要なのは、同じルーチンで同じことが毎日起こるということを子どもたちが体験する。何時に寝かしてもらって、翌朝、目覚めたときに同じ家にいて、という信頼のおける環境が一貫して

そこにあることを客観できることが非常に重要と考えられています。

◇トラウマを受けた子どもがケアを受け入れるまでに時間がかかる

子どもに何かを与えることは、当然、重要と理解すべきことですが、それを子どもは拒否する、拒絶するということも理解しておかなくてはいけません。

私が世話をした最初の少年は、私に何も要求しようとせず、私が与えた物は必ず捨てるかメチャメチャにしていました。1年以上経って、与えられた物の一部を喜ぶようになった時、「何かほしがると両親から欲が深いし悪いと言われたので、人になにかねだることはなかった」と話してくれました。

しかし、彼が言うには、ここに来た時、他の子どもが食べたい時にビスケットなどを取って食べているのに、誰からも叱られないことに気付いたということでした。

彼は、ここではいいんだと思ったけれども、ねだったり、質素なビスケットのようなものを楽しむまでに1年以上かかったのです。

◇ よくなることは、物事を悪くすることがある

トラウマを受けた子どもたちのケアにあたって、学んだ重要な教訓は、よくなることは物事を悪くするということでした。

子どもが信頼を寄せてくれて希望がもてるようになると、彼は自分が受けている積極的なケアの信頼性をテストするような問題行動を示すようになります。

また、子どもが防御的でなくなり、感情が出せるようになると、自分の過去の体験への強い感情が芽生えてくるのです。

たとえば、子どもは人生で失ったことに対して沈みこんだり、怒りを感じたりすることがありました。

子どもはよくなっているのに、物事は悪く感じられることがあるのです。回復への道のりは、2歩前進し、1歩後退するという具合です。

これはちょっと混乱を招くかもしれませんが、我々は子どもにとって正しいことをしてあげようとしているわけですが、子どもは不信感を持っています。それでいてなかなか背を向けることはできない。信じることができない。いずれこれは続かなくなるのではないか、いずれ拒絶されるのではないか、どっかに行ってしまのではないか、という不信感を常に抱いています。

これはよくあることですが、子どもの状態が良くなっているにも関わらず、一見何か悪くなっている。つまり二歩前進して一歩後退しているという状態がよく見られます。これは、非常に混乱を巻き起こします。難しい子どもたちと向き合っていて、子どもがだんだん良くなってきたなということで、非常にうれしく思っていた途端に、突然また悪化してしまうと。

これにはいろんな理由が考えられると思います。うまくいっている子どもたちが、突然また悪態をついてくる。そういうときは、何かを試しているという場合があります。自分の状態が良くなれば、そこまでサポートも必要なくなってしまう。つまり、これ以上ケアを受けられないのではないかということで、試し行動に出る場合があります。子どもたちが安全な環境にあるということで、自分たちが安全性を確保できたと思ったら、逆行するような形で、行動に出てくることがあります。例えば、感情的に幼児期に、本当はこうして欲しかったと、ああしてほしかったと

いうニーズが満たされていない場合に、それが逆行して、感情として、大きくなってからも出てくる場合もあるということです。

◇　シンボルによる伝達

私が面倒をみていた別の少年は、シンボルによる伝達の意味を学ばせてくれました。

トラウマを受けた子どもたちは、自分たちの感情を言葉を使って伝えることが出来ない場合があります。しかし、彼らは遊びや描画などの方法でシンボルを使っています。子どもが話しかけても反応がない場合、このことに気づいてよく観察しなければなりません。

たとえば、子どもが遊んでいる時、玩具の動物や遊んでいる人々との間に発生する暴力に気づくことがあるかも知れません。
いろんな子どもたちの行動をよく観察していますと、例えば遊んでいるところでも、描いている絵でも、何か欲しいもののようなコミュニケーションをとっている場合があります。そこで例えば、人形なようなものを使って、女の人を男の人が殴ったりとか、投げ飛ばしたりとか。そういうことをしているときもあります。虐待を受けた子どもたちの描く絵を見ると、非常に恐ろしいものがなかにはあって、大人が、考えもつかない経験をしてきた子どもがいます。それは、その絵にそのまま表現されています。彼らの人生、これまでどういう体験をしてきたのかということが、そのまま絵に表現されている場合があります。

◇　フランキーと蛙のフリーキー

英国では、ほとんどの子どもたちがテディベアというぬいぐるみを持っています。恐らく日本では、テディベアを持っている子どもは少ないと思いますが、私がお世話をした子どもたちには、よくテディベアを持っていました。

そうしますと、コミュニケーションをとるとき、何かを伝えるためにそのぬいぐるみを使ったほうが、より安全なコミュニケーションができるということがありました。例えば、「このクマちゃん、テディベアがあんまりきょうは気分が良くないんだ。早く寝かしてあげて、何か飲み物でもあげてくれない」と言った子どもがいました。「どうしてそのクマちゃん、具合が悪いの」と聞いたら、その子は、「ママがいなくなってしまって寂しいから」というふうに話しました。

◇　フランキーと蛙のフリーキー

「何か、ぬいぐるみのようなものを作ってくれない」と、ある日、フランキーから頼まれました。どんなぬいぐるみがいいのかと聞いたら、「カエルのぬいぐるみがいい、名前はフリーキーと名付ける」と言っていました。当時、私は23歳の男性でしたが、カエルのぬいぐるみを作るキッドをいたるところで探し回りました。実際に、それを探し出しまして、縫い合わせて、きちんとぬいぐるみを作りました。名前も非常に似てますよね。フランキーとフリーキー（ちょっとヘンという意味）、フリーキーは、フランキーのカエル版だというそのシンボル的な意味がすぐにわかりました。フランキーは、機嫌が悪かったり、気分が悪かったりすると、フリーキーの気分も悪いということで、よくフリーキーを引きちぎったり、ごみ箱にほおり投げたりしていました。これはバーバラ先生に相談したところ、バーバラ先生は、毎回、フランキーが、フリーキーを引きちぎったり、バラバラにしてしまったとき、ちゃんとそれを修理

して、縫い直すように言われ、私は自分で縫ってわたしたのです。

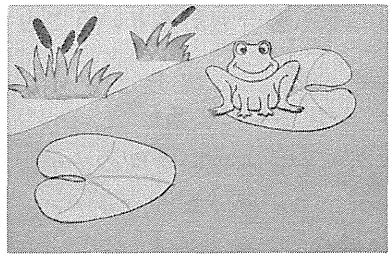
これは、ちょっとばかばかしく聞こえるかもしれませんが、非常に象徴的な出来事なのです。フランキーが非常に気分が悪くて、自分はもう存在する価値がないのではないかというふうに感じていたときに、フリーキーに何かダメージを与えるわけです。それを破壊したところを、私の仕事としては、元に戻してあげる。修理して縫い直してあげるということで、君は、ちゃんと存在する価値があるんだよ、ちゃんと直してもらう価値があるんだよということを伝えていたわけです。状況は1年ぐらいたつと、だんだん良くなりました。

我々は、子どもたちの進行状況を評価する作業を大体、半年に1回ぐらいやります。チームメンバーと話し合って、子どもたちがどういう発育状況なのかを話し合っています。

フランキーについて評価をしていたとき、バーバラ先生の意見は、フランキーは列島のような存在だと、おっしゃっていました。その意味するところは、フランキーは大丈夫なとき、気持ちが落ち着いているときは、特に問題はないのですけれども、突然、海に落ちてしまう。そこは混沌とした場所になってしまう。ですから、彼が島に移動するときに、混沌とした海に落ちないように支援する、サポートしてあげるのが我々の仕事だと、バーバラ先生はおっしゃっていました。

同じとき、私がフランキーを学校に迎えに行ったときに見せてくれた絵がありました。彼はゲームをしようと言ってきました。フリーキーが、一枚の葉っぱから次の葉っぱに移るときに、なんとかフリーキーが水のなかに落ちないようにするのが、自分たちの務めだと言っていました。

41. Lily Pad Game
はすの葉っぱのゲーム



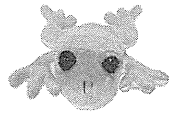
まさに、われわれが1時間ほど彼について話をしていたときに、彼にこうしなくてはいけないといったバーバラ先生の話をそのまま、彼の口から伝えられたことに、ほんとにびっくりしてしまいました。

◇ フランキーの退所

フランキーは、2、3年の間に非常に良くなって改善し、14歳半ぐらいの年になって、もっと独立して子どもたちが住める施設へと移動していきました。

フランキーがとても良くなったので、ホームから退所するというとき、フリーキーも同時に、飛行機のパイロットの仕事が得られたということになりました。フランキーが前に進める状況になったとき、フリーキーも別に仕事をするために別の場所へ移動できることになったことが、非常に私にも興味深いことでした。

38. Freakie the Frog
蛙のフリーキー



フランキーの状態がどんどん良くなっていくと、おかげで、フリーキーも泥のなかに

投げ飛ばされたり、ズタズタにされることがなくなりました。

ここで関連のあるお話をさせていただきます。フランキーの場合と合わせてお聞きください。普通の子でも、特に難しい状況を抱えている子どもでも、特に難しい子であれば、コミュニケーションを非常に取りずらいということがあると思います。ですから、よくよく観察をしてみると、子どもの反応、そして何かシンボルのような、象徴的なものを使って、何かを伝えようとしているということがありますので、そこをよく見逃さずに観察していただければ、いろいろと発見があると思います。

【質疑応答２】

トムリンソン：このセクションは以上です。何かご質問がある方がいらっしゃいましたら、ここで、質問を受けたいと思います。いかがでしょうか。

質問者２：　児童相談員の仕事をしていますタケオと申します。大変難しいお子さんたちがいらっしゃるんだなあとお話をうかがいました。この子たちはどういう経緯で先生のいらした施設に来たのか、その辺りを教えていただきたいと思います。

トムリンソン：　イギリスでは、ソーシャルサービス機関がそれぞれの地区のソーシャルサービスが必要な子どもたちを守るサービスを提供しています。何か子どもに関して懸念することが生じた場合、あるいは、子どもが危険な状態にあるのではないかと察知した場合、このソーシャルサービスに、日本でいう児童相談所のようなところに相談する、又は通報があがってきます。それはお医者さんや学校の先生、家族もしくは親戚や近所の方からの通報があるということです。通報を受けたソーシャルワーカーは、調査を開始して、子どもが安全な状態にあるかどうかを調べます。その段階で、２、３の選択肢があります。親をある程度支援をすれば、子どもはそのまま家に居続けることができる場合があります。あるいは、親たちの家庭に問題があるときは、自発的に子どもを施設に本当に短期間ですけれども預けて、その間に、なんとか自分たちの足元を立て直して、子どもを取り戻してもらう場合もあります。
もしくは強制的に子どもを家庭外に引き取るという措置命令が出る場合もあります。それは家庭にとどまることが、子どもにとって安全ではないと判断された場合です。そうなると、親が子どもに会うことも許されないという制限がかかる場合もありますし、犯罪が絡むという場合もあります。例えば、虐待を受けたとか。それが発覚した場合には、親が訴えられるということもあります。

多くの場合、治療的施設へ入所する子どもたちは、安全な環境にいなかった子どもたちが多いと思います。また子どもがそのリスクを体験していることもあります。

例えば、子どもが傷ついていたり、あざを負っていることや年齢を重ねていくごとに問題行動を起こすことが多くなり、不適切な行動、逸脱した行動に出たり、非常に攻撃的であったり、もしくは性的行動に出る子どもがいて、そういう懸念が募ってきます。それで、家庭の調査をするために踏み込んでいくことがあります。実際には、表だって知られていなかったような家庭内の問題が顕在化してくることもあります。

質問者２：　ありがとうございました。先ほど、６万５千人のお子さんたちの多くが、里親さんのところで育てられているというお話でしたが、にも拘わらず、先生の施設に入ってくるお子さんは、何か特別な理由を持

っていらっしゃったのかなと思いましたが、いかがでしょうか。

トムリンソン：　英国は 30 年前と比べますと、施設入所は大変少なくなっています。可能な限り、ソーシャルワーカーは、里親制度を利用して、フォスターペアレンツの家庭で世話をしてもらうことが、子どもにとっても最善の選択肢だと考えています。ただ、子どもによっては、その里親のもとで暮らすことがあまりにも難しすぎるという子どもたちがいます。子どもによって、家庭がこの上なく危険な場所だと認識している子どももいます。これまで本当にひどい目に遭ってきたわけですから、とても恐ろしい場所にしか見えないのですね。ですから、里親家族にも攻撃を重ねて、そこを追い出されるまで、問題行為に走るという子どももいます。治療的施設に入所する前に、5カ所から 10 カ所ぐらいの里親を経て、そこで常にうまくいかずに、最終的に施設に入所するというケースもよくあります。

質問者２：　ありがとうございました。

質問者３：　里親のタケナカです。先ほど、子どもが８歳から 14 歳までが入所しているというお話でしたが、ここを出たあと、そのケアはどこまで続くのでしょうか。ちなみに日本は、18 歳までで、運が良ければ 20 歳まで続く子どもがいますが、長くても 20 歳までで退所します。イギリスでは、どのように何歳までケアを続けられるのでしょうか。

トムリンソン：　英国の場合、施設入所はあまりいいものではないと多くの方が考えています。やはり子どもにとっては、家族という形がベストではないかと。過去に実際に、施設のなかで虐待があったという経緯もありました。私が、お話してきたような施設になりますと、非常にコストが高くついてしまいます。ですから多くの地方政府はできる限り、里親制度を活用して子どものケアをしていきたいと考えています。子どもが施設で２年～２年半ぐらい過ごしたあと、改善が見られたときには、ソーシャルワーカーが、良くなってきたので里親に預けてはどうかという提案をすることが往々あります。もし日本の施設の環境がよく、子どももそこで満足しているということであれば、一貫性を保つという意味でその施設にとどまるということは良いことかもしれません。

英国では、いったん、その施設を出て、退所したあとに、里親に預けられても、そこでうまくいかなかったがために、また元に戻ってしまう、再度、施設入所というケースもよくあります。イギリスの場合、通常は 18 歳ぐらいまで、そういった施設で支援を受けることができます。場合によっては 21 歳まで、サポートしてもらうこともできますが、その施設を退所してからが、非常に難しい環境が待ち受けていて、やはりいったん施設を出てしまうと、なかなか頼れる家族もいないということで、退所後の子どもたちの問題は非常に大きな課題です。

質問者４：　大変興味深いお話をありがとうございます。早稲田大学大学院のオオヤといいます。まず２点お伺いします。

支援する際に、支援者の精神回復力が非常に必要だという話がありましたが、精神的な回復力は、もともと支援者が持っているものなのか、それとも養成するとか、育てていけるものなのかという質問がその１点目です。それからコミュニティの中で、例えば、ストレスがかかるときにどのような形で精神的に回復できるのか、なにか方法があるのかどうかをお伺いしたい。

トムリンソン：　非常に重要な、また興味

深いご質問をありがとうございます。私も英語でいう Emotional Resilience、感情的な回復力、メンタルな強さに関してかなり関わってきました。まず、この人が本当にそういう回復力、強さを持っているかどうかを推しはかるテストがあります。これは、防衛の仕組み、ディフェンス・メカニズムを知るという方法です。ある意味で、こういった回復力、強さは内在しているもので、もともと、その人に備わっていたものが一部にあると思います。子どもの頃、やはり防衛本能といいますか、無意識のうちに何かストレスを抱えたり、不満な状況に置かれたときに、自らの身を守るための防衛本能が働きます。英国では、それを thick skin と言いますが、日本語でいうとなんでしょうか。悪くいうと、面の皮が厚いという意味があるかと思いますが、何か侮辱されたときに、それに対して怒りを持ちこたえるというか、それを意に介さないという厚かましさみたいな強さを持ってるかどうかということですね。 そういうふうに、ある意味で、厚かましさみたいなものがある人は、他方で、あまりセンシティブでないとか、感情的に細やかでないことが多いですね。ですから、多少のことは気にしないぐらいの皮の厚さというが必要ですが、それだけでは生き残れないですね。一方で、やはり、子どもたちの感情の揺れ動きとか、そういったものを感じ取れる感性も必要になってきます。そういう神経の太さを持ちつつも、その感情の細やかなところを理解できる感受性を持っていなければ、どうしても失敗してしまうと言えると思います。ですから神経の太さを持ち合わせながらも、感受性もある方が、一番望ましい。あまりにも神経が細い方であると、置かれている環境に圧倒されてしまうことが多いと思います。

人によっては、もともとそういった精神的な強さを備えている方がいらっしゃるわけです。難しい環境でも耐えうる太さがあるということです。

一方で、なんとか戦略的に難しい状況でも対応していくということで、徐々に改善していく。もともと持っていた力以外のところで、偶然的にそういう能力を身につけていくということも可能ではないかと思います。すべての状況にそれで対応できるかどうかはわかりませんけれど。もし私が、神経が細く、ある状況では耐えられない、殺されてしまうような状況にあるとき、少し休みをとって、落ち着く時間を設けて、自分で再生していくというようなやり方を取ることによって、違いも生まれてくると思います。多くの場合そういうやり方を取って状況が好転するということがあると思います。

自分がどういうふうに、その状況に向き合ったかということが、ストレスの対処法です。私は、元々、神経が太いほうですので。あとは、周りの人に自分の状況について話をすることができたことでした。例えば、まず上の方の先生方に話すことによって、サポートを得られました。それが大変役に立ちました。よろしいでしょうか。

質問者３： はい。

質問者４： 里親のアンドウといいます。きょうはありがとうございます。今の質問の続きになりますが、勤務時間がとても長くて、子どもとトラブルが多いと、大変疲れると思います。勤務時間が長くて、ストレスがある仕事ですと、スタッフのケアも必要だと思いますが、そういったスタッフに対するケアもあるのでしょうか。そして、こういうハードの勤務だと、勤続年数が短いスタッフも出てくるのではないかと思います。日本の施設で

は、職員の勤務年数がとても短くて、それが子どもとの信頼関係を作ることの妨げになっていると伺っています。イギリスではどうでしょうか。

トムリンソン： スタッフとおっしゃったのは、施設のスタッフという意味ですか？

質問者４： そうです。日本の施設職員の勤続年数は、だいたい３年から４年です。

トムリンソン： 里親であっても、施設でのケアであっても関係なく、私がこれまでお話してきたような問題を抱えた子どもに関して申し上げますと、もちろんスタッフのサポートが必要と思います。特に、非常にトラウマを受けたような子どもを、ほかからのサポートなしで支援することは不可能に近いと思います。そのサポートの中に含まれますのは、スーパーバイズと言いますか、定期的な面接と、シニアとか同僚、あるいは上司の方とミーティングをもって、どういう状況なのか、何が起こっているのか、どういうふうに自分は感じているのかということを話し共有する時間が必要になります。大きなトラウマを持った子どもに関して申し上げますと、少し治療的な支援が必要になるかもしれません。例えば、精神科医のアドバイスを受けたり、子ども専門のセラピストの支援を受けたりということです。トラウマを受けた子どもたちが、どういう反応を返してくるのかということを理解する必要があります。もちろんフォスターケアをするということで、里親の方に対するトレーニングも必要になると思います。子どもたちの発育に関していうと、書物を読んだりとか、議論したりということで、理解を深めていく。また、トラウマを負った子どもたちにとって、いかに愛着のある関係を築くことが重要なのかを理解する必要があります。

最後のほうで、イギリスでの状況はどうなのかというご質問がございましたけれども、まず、子どもたちの態度によって、どういう里親のもとに送られるのかということがイギリスでは区別されています。普通の里親のもとで暮らせる子なのか、それとも非常に深刻な状況で、特殊なケアが必要な場合もありますので。その場合には、特殊な状況を支援をしていく組織があります。里親対しても、スタッフから支援を与える場合もありますし、職員の方からの支援を得たり、トレーニングを 10 人から 12 名ぐらいの里親さんに行う場もあります。先ほど、職員やケアをする方が、短期間でお辞めになってしまうという重要な点をご指摘いただきましたが、これは当然、子どもにとっても非常に影響のある話です。子どもたちもいろんなところを転々としてきた子が多いわけですから、非常に悪影響が出てしまいます。ですから、より問題が大きくなってしまうということが往々にしてございます。最初から非常にいいケアをしていくということは、当然、コストも高くつきますけれども、それをやらないことによって、長期的に問題がさらに複雑化して、子どもがもっと難しい状況になって、信頼感も損なわれてしまうということもありますので、やはり職員や子どもをケアしている方たちに支援を与えるということも必要なことだと思います。

楽しい時間はすぐ過ぎてしまうとよく言いますけれども、３時半になってしまっていますので、また５分間ほど休憩を取らせていただければと思います。

質問者５： 済みません。もう一つだけ質問させてください。日本では労働基準法で週 40 時間という勤務時間が定められていますが。先ほど、週 70 から 80 時間の労働をさ

れているとお聴きしました。イギリスでは労働基準法みたいなものと、労働組合が職場にないのかどうか、お尋ねしたい。

トムリンソン：　さきほど申し上げたことは 30 年ほど前の話ですので、やはり今は、イギリスでも同じように規制がかかっていて、週 40 時間しか働けなくなっています。ある意味で、我々の仕事はやりづらくなっていると思います。70 時間といっても、やはりボランティア的に、自分的に我々は働いていたのですが、今はそれができなくなっています。当時は、10 人の子どもを５人で看ていたのですが、今は逆で、５人の子どもを10人で見るという状況にあります。しかし、個人的な注意を子ども一人ひとりに向けるということでは、今のほうが難しい状況にあるということです。

それでは５分間休憩したいと思います。

（前半終了）

【講演後半】

Life Story Work

ライフストーリーワーク

トムリンソン：　再開させていただきます。先ほどのプレゼンテーションでは、資料を最後までお話しできませんでしたが、ライフストーリーワークのプレゼンテーションに移ります。できる限り、本日ご参加の方々に関連のあることに絞り込んでお話したいと思います。

まず、私が日本に招いていただけるということで、どういうお話をすべきかということを開原先生にご相談させていただきました。まず私自身がどのように関与してきたかということ、トラウマを受けた子どもたちとこれまでの取り組みについてお話をしたほうがいいのではないかということになりました。それからトラウマを受けた子どもたちの治療的ケアを検討していくということになりました。

◇　ライフストリーとはなにか

また、子どもそれぞれの人生、そのライフストーリーを語ることは重要なことだと思います。恐らく、お隣の方に、自分の人生について何かお話してくださいと言ったら、10分間ぐらいで、お話しいただける方もいるかもしれませんが、人によっては１時間ぐらい続けられる方もいるかもしれません。我々の人生のストーリーは、我々自身のアイデンティティを作っていくことになります。自分が誰を知っているのか。家族、友人などを、これまで私を知ってくれた人たち、そういった周りの人を知ることによって、自分が誰なのかをあらためて認識することができます。

施設又はその他のケアを受けるような状況になった子どもたちは、それまでやはり混沌とした状況のなかで、トラウマを背負ってきたわけです。ですから、自分の人生について何もストーリーなどを語れないという子もいます。その結果、自分が一体誰なのか、どこからやってきたのかということに一貫性を持ったストーリーを感じることができない、いわゆるアイデンティティの拡散といわれる状況に陥っています。

ストーリーを語れる子どものなかには、必ずしもそれが真実ではないという場合もあります。間違った認識であったり、事実と異なる内容が反映されるということもあります。

◇ライフストーリーワークをする意味

多くのケアを受けている子どもたちにとって、こういうライフストーリーワーク

をすることが非常に重要な意味があります。その理由は、まず子どもたちが、自分自身の歴史を発掘する、発見していくということだからです。自分の背景や文化がどういうところにあるのかをあらためて問い直していくということです。

子どもによっては、単にそのストーリーを作っていくだけでなくて、そのストーリーに対して、自分たちがどのように感じているのか、そういう感情を見ていくことも必要です。

これはよくある例ですが、親元から引き離されて、施設に入ってくる子どものなかには、自分たちが悪い子どもだったので、こういったところに入れられてしまったとか、虐待を受けたことについて、自分の責任だという自責の念に駆られている子どもたちもよくいます。これは、彼らの自分自身の人生に関するストーリー、彼らのバージョンということになります。そういう自責の念に駆られているような子どもたちが成長すると、非常に、破壊的な影響力を及ぼすことが明らかにされています。子どもによっては、ライフストーリーワークが必要とされている場合がありますので、主に、混乱している難しい部分に関しての理解、そこを紐解いていくことです。

そこまで複雑なケースではなく、両親から里親家庭に移って、ある程度の安定性を保たれているという関係であれば、そこまで踏み込んだライフストーリーを必要としていないということもあると思います。

ただし、いろんな場所を転々として、施設等を渡り歩いてきて、非常に混乱している、また自分自身の歴史について非常に歪んだ考え方を持っている子どもには、このライフストーリーワークが、特にプラスに働くのではないかと思います。

これまで、こういう子どもたちとかかわったことのある方、もしくは過去又は今現在、そういう子どもたちと関わっている方、ちょっと挙手をお願いしてよろしいでしょうか。どういった子どもでも結構です。

トムリンソン： もちろんご自分の子どもであれば、子どものライフストーリーはおわかりだと思いますけれども、そうでない子どもと関わるとき、その子のこれまでの経緯とか、子どもについてどれだけわかっているのか、どんな知識をもって向き合うのか、どれだけ十分な知識を持っているとお感じになりますか？　子どもたちについて十分わかっていないと感じられる方、挙手をお願いします。

ありがとうございます。

その子がどういう子どもなのか、十分な知識をもっていないと感じてらっしゃる方が非常に多いということですね。

◇ライフストーリーワークの重要性

このライフストーリーワークの重要性は、里親でも施設関係者でもケアしている方が、その子どもの歴史や経緯を知らずに、その子どもを理解しようとしていますが、それは無理だと思います。ですから、ライフストーリーワークをやらなくても、その子がどのような歴史をたどってきたのかを知ることは非常にいいことだと思います。

例えば、なかなか寝つかない子ども、非常に寝かしつけるのが難しい子どもが、なぜなのか、ということです。不安があったり、例えば、悪い夢を見るとか、虐待をされたことがあるのでなかなか寝付けないのか、あるいは夜寝るときになると、何か悪い、ひどい体験を受けたことがあるのか、眠れない理由はよくわからないわけです。

その子どものこれまでの人生を学んでいくなかで、非常に難しい体験をした子なんだということがわかれば、マイナスの体験をする一方で、プラスの面を発見していくこともあります。例えば、子ども自身は記憶に残っていなくても、調べていくうちに、その子と関連性のある人で、何かその子にとってプラスの部分を与えることができた人がいたのかもしれません。その子は覚えていないけれども、新たにその人とつなぎ合わせて接点を持たせることが、可能になる場合もあります。

ある日、私がお世話をしていた子どもの一人が、朝食を食べていまして、「学校に遅れるから早くご飯を食べなさい」と言ったことがあります。そうすると、その子は突然、叫び出して、もうどうしようもない状態に陥ってしまいました。本当に、取り押さえなくてはいけないような取り乱し方でした。ただ、朝食を早く食べ終えなさいと言っただけで、そのようなパニック状態が起きるということは、理解しがたい驚きだったのですが、この子に関して非常にいろんな情報が入ってきていたので、その資料に目を通していくなかでわかったことは、6歳か7歳のときに、その子が朝食を食べていて、「早く食べなさい」と言われて、その通りにしなかったがために、お母さんから頭を杖のようなもので、激しくたたかれていた。それで大けがをして、病院に連れて行かれて、傷口を縫わなくてはいけない状態になったことがわかりました。ですから、それまでの子どもの経緯についての情報をできる限り多く集めることが大変参考になります。

先ほど申し上げた通り、必ずしもこういった情報を知ることがイコール、ライフストーリーワークをしなくてはいけないということではありません。ただ、そういう情報が、子どもを理解するために大変役に立つということを申し上げたいと思います。

◇ライフストーリーワークはどんな方法でするのか

もし、ライフストーリーワークをやるということになりますと、子どもと話合わなければならないということですから、その準備が整ったときに、子どものペースで進めることになるわけです。非常に難しい作業になると思います。子どもも感情がかき乱されたり、悲しい気持ちになったり、怒り始めるということが起こりえますので、簡単な作業ではありません。

最近、リチャード・ローズさんという方が、来日されたということです。このライフストーリーワークの本を出している方です。このローズさんがおっしゃっているには、ライフストーリーワークをやるのであれば、これは里親の方が直接するのではなくて、里親は、あくまでも支援に回るサポーターとして、子どもを落ち着かせる役割をして、ライフストーリーワークの作業自体は、ライフストーリー・ワーカーというセラピスト的な役割をもつ方に行っていただくほうがよいと言っています。本当にその子が、ライフストーリーワークを必要なのかということも注意深く判断する必要があります。ローズさんは、必ずしも全員の子に必要とは言っておりません。我々のSACCSでは、多くの子どもたちは、10カ所ないし20カ所ぐらい、いろんな家庭を経て施設に入所しています。ライフストーリーワークを行なうとき、それが役に立つと判断された場合に、きちんと計画を立てなくてはいけないのです。やるということが決まって、すぐに取りかかれるものではなく、一体誰がするのか、どのぐらいの頻度で

やるのかということをきちんと計画を立てて、それに沿ってやっていかなければいけません。例えば、４日に一度ぐらいのセッションにするのか、その支援者やケアする者はどう関わっていくのか、誰が実際にその作業に携わるのかということを決めなくてはいけません。

それを、次のセクションで、ザッと見ていきたいと思います。十分に質疑応答の時間を取っていきたいと思います。

このライフストーリーワークをやることが、本当にその子にとってプラスになるのかどうかということを、どのように判断していけばいいのかということですが、やはり子どもも、自分の感情を表現するボキャブラリー、語彙（ごい）が必要になってきます。自分がどういうふうに感じているのか、悲しいのか、怒っているのかという、その人間的な感情を表す、そういったボキャブラリーが必要になります。こういう感情について自己表現できない子どもにとっては、こういう作業というのは非常に役に立つと思います。もし、ライフストーリーワークをしなかったとしても、感情表現をするための十分な語彙を身に付けるということは重要です。

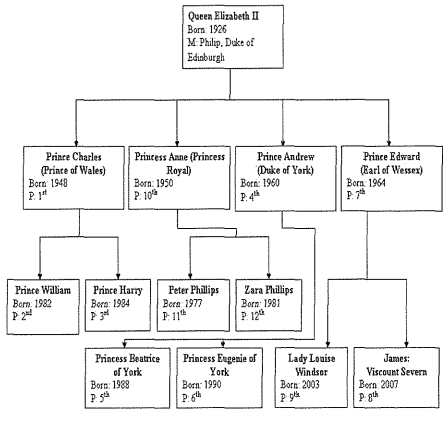
昨日、情短施設の那須こどもの家を訪問させていただきましたが、そのなかで使われていたのは、子どもの感情表現を見つけるカードがありました。楽しいのか、悲しいのかということを表現するようなカードを使って、こういう感情を抱いているんだということを特定できるように、子どもたちの助けになるような形で、そういうカードを活用していました。

◇ファミリーツリー

この家系図はファミリーツリーと書かれております。この子について、どれだけのことを知っているのか。今日とか明日にでも、必ずしも、ご自身でなくても、その子についてのヒストリーをお書きになってみたらいかがでしょうか。

これは、英国王室の家系図になります。ちょっと複雑に見えるかもしれませんが、

13. Useful Tools - Family Tree
役に立つもの　家系図

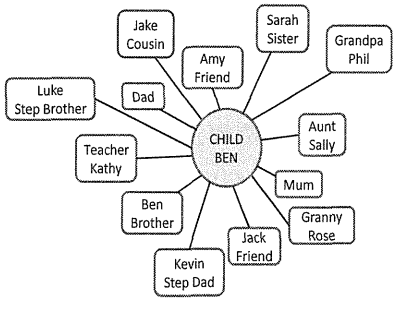


これには、その祖先が記載されていません。その下をご覧いただきますと、チャールズ皇太子、これは、まだまだシンプルです。一番上がエリザベス女王とフィリップ殿下ですね。お二人の兄弟、姉妹等はこれには記載されておりません。そしてプリンセス・アン、プリンス・アンドリュー、プリンス・エドワードと続いております。チャールズ皇太子の下には、アンドリュー王子とハリー王子がいらっしゃいます。チャールズ皇太子は、２回結婚されておりますので、カミラさんもダイアナ王妃もいますが、この家系図には載っていません。ちょっと皆さん、そこまで気づかれたかどうかわかりませんけれども、(笑)確かアン王女も２回、再婚されておりますよね。アンドリュー王子も結婚されましたが、離婚しております。非常に複雑だということ

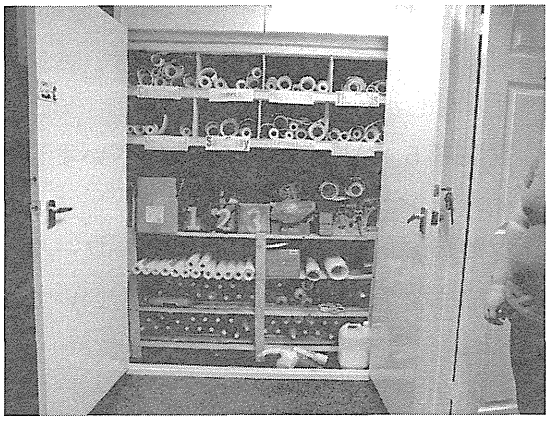
がご覧いただけるかと思います。それでも、われわれが向かい合っている子どもたちと比べると、そこまで複雑ではないと思います。

◇エコマップ

つぎに、このエコマップをご覧いただきますと、家系図というほどのものではないですけれども、その子にかかわっている人たちとの距離感みたいなものが示されています。これは非常に密接にかかわっている人、子どもにとって重要な人たち、例えば、



お母さんが、子どもに一番近いところで示されています。義理の父親はもう少し離れたところに位置にあります。もし、ライフストーリーワークをやると決めた場合、通常１年から１年半ぐらいの準備期間を設けます。子どものペースで、準備が整ったと思われたときに始めるということです。



一つのやり方として我々が用いているのが、この壁紙を用いたやり方です。その壁紙にいろいろとプロットしていく、重要なその子の歴史についてのイベントをどんどん、１枚の壁紙に書くことができます。壁紙を使うことの利点は、いろんなものを貼り付けたり、写真を付けたりすることもできます。もし、子どもがこれをプライベートなことで、あまり公開したくないと思うときには、それを封筒のなかに入れてしまうことができます。そうすることによって、より安全を感じてもらうことができます。行ったり、元に戻ったりということで、その時系列的にも自由が利きますし、また、人生と一緒で、本のようにページをめくるのではなくて、壁紙ということで、巻き戻したり、広げていくことができるのが壁紙のいい点ではないかと思います。実際にこの壁紙を使うやり方は、子どもたちからライフストーリーを引き出す過程で使います。そして最後にその作業が終わった段階で、今度はライフストーリー・ブックを、本の形にします。それを子どもがずっと、保管できるようにルーズリーフ系にしております。ある特定のページを取り除いたり、追加したり、と、見せたいときには、そういうこともできます。また電子版ということ

で、パソコンでそれを見ることもできます。

これは、ライフストーリーワークのことを勉強に来ていただいた平田修三さんです。SACCSにいらっしゃったとき撮られたものです。

【質疑応答　3】

トムリンソン：　それではあとまだ30分時間がありますので、何かご質問がある方いらっしゃいましたら、お聞きください。

質問者5：　里親のタケナカです。ライフストーリーは非常に素晴らしいと思いますが、子どものトラウマの話とか、それから過去に受けてきたさまざまな子どもの体験を聞くときに、準備を受けて、心の準備というか、備えができていない人が聞いたときに、聞いた人がその被害を受けてしまうようなことがあると思うんですが。やはりそこら辺、聞く側の注意と言いますか。気を付けなければならないこと。もしくは、そのライフストーリーワークをする際に、責任を持つ方のマネジメントについての注意点ですか。それをお聞きしたいと思います。

トムリンソン：　非常に重要な質問をしていただいたと思います。まず1点目としては、本当にその子にとって今、このライフストーリーワークをやることが必要かどうか、これに確信を持たなくてはいけません。タイミングとして、今が適切なことなのか。そしてほんとにその子が必要としているのか。もしそこで疑念が生じる場合や懸念がある場合には、その作業を行うことによって、子どもが新たなトラウマを負ってしまうのではないかと。もし準備が十分整っていない場合には、その可能性があります。ライフストーリーワークをする方、実際にそれにかかわる方は、トラウマとはどういうものなのかを十分に理解して、それなりの能力を持った方が、対応するべきなのです。あまり熟慮せずに、十分な準備なく取り組むべきものではないと思っています。理想的な状況では、誰かほかの人に相談できる環境が望ましいと思います。その分野の専門家等の方と話をしながら、やはり自分だけでやろうとすると、非常に難しくなってしまうと思います。

第一段階としては、ライフストーリーワークをやらないにしても、その子に関する情報を収集してくるということがまずファーストステップにあげられます。その子のこれまでの経緯。歴史はどういうものなのか。そのなかで、いろいろと情報がわかってくれば、これまで知らなかったようなこと。その子について、いろんな情報が分かってくれば、これはやらないほうがいいだろうという情報も含まれているかもしれません。

先ほどのダメージがあるのではないかというお話ですけれども、その可能性は十分にあると思います。子どもたちは、自らの過去について話をしなくても、ほかの方法で、必ずそれを示します。例えば、虐待を受けた子どもであれば、その体験についてそのものは語らなくても、その経験が映し出されるような行動に出るということがあります。ですから、いずれにせよ、同じような支援が必要になります。自分たちがこれまでどういう体験をしてきたのかということを話さなくても、何らかの形で、必ず表れてきます。お答えになりましたでしょうか。

質問者5：はい。ありがとうございました。

トムリンソン：　外に質問は?

質問者6：　ライフストーリーワークのことではなく、SACCSのことでもいいでしょうか。

トムリンソン：　その前に、ほかにライフ

ストーリー関係でご質問のある方いらっしゃいますか。それでは、SACCSの件でご質問いただいて結構です。

質問者６：　里親不調でSACCSに来られたお子さんたちの場合、その里親がイギリスでは、ゲイの方も可能になっておりますけれど、同性愛者からの性的虐待というようなことがあるのかどうか、お伺いしたい。

トムリンソン：　今のご質問に対しては、あまり具体的なお答えを持ち合わせていませんが、多くの場合、そこまで里親から虐待を受けたという話は耳に入ってこないですね。もちろん、それはケースとして起こり得るということで、実際にも起こっているとは思いますが、虐待するというよりも、その子どもたちとうまく向き合えないというか、うまく対応できない。ですから、子どもにとって結果的にあまり役に立たないような言動をしてしまうということはあり得ると思います。ちょっと懲罰的なやり方をとってしまうケースはあると思います。ただ、里親による虐待で子どもが保護されるというようなケースが多いとは認識しておりません。

小松：　ありがとうございます。

質問者６　ライフストーリーワークについて、具体的なことを少し教えてください。まず準備に１年から１年半かけると伺いましたが、その準備に、エコマップとか、壁紙を作るというその作業が入ると考えてもいいんでしょうか。

トムリンソン：　ライフストーリーワークの情報収集の部分ですね。これだけでも３カ月から６カ月ぐらいかかることがあります。この情報収集自体が非常に難しいことが多い。日本でもより難しいかもしれません。もしこの仕事を先に進めるということならば、まず、子どもとの関係を構築しなくてはいけないのです。例えば、実際の作業を始める前に、１週間に１回ぐらい子どもと顔を合わせてゲームしたり、一緒に遊んだりして信頼関係をまず作っておかなければいけないのです。次に、どういう話をしていくのか、プロセスに関して子どもに、どんな期待をしてもらうのかというところを話さなくてはいけないんですね。どこで線引きをするのか。どのぐらいの頻度でするのか。場所はどこなのかということも、話すようにします。子どもにも、ちゃんとコントロールできるということを理解してもらいます。もし話したくないことがあれば、無理して話す必要はないんだということをわかってもらいます。

実際、そのライフストーリーワークのセッション自体が、１年ぐらいかかることもあります。25 回のセッションと仮に考えて、２週間に１回、隔週で行うことで、１回あたり１時間ぐらいのセッションとします。つぎに、３カ月～６カ月ぐらいかけてライフストーリーブック、本を仕上げていきます。そして、来上がったものを子どもと共有して、本のスタイルについて、何か改良点があれば、子どもの意見を取り入れます。実際に、子どもがその本を作るわけではないのですが、それを見てもらって、こうしたほうがいい、ああしたほういいという希望を取り入れます。

質問者７：　あと１つだけ質問です。壁紙は何メートルぐらいのものを用意していますか。

トムリンソン：　壁紙は１５メートルありますが、また調べてお答えできるかと思いますが、３、４メートルぐらいであってもおかしくないと思います。

質問者７：－　ありがとうございました。

トムリンソン：　こういう内容で、もっと詳細情報が欲しい方は、ｅメールででも、私